
からから-くるくる ~春~

Wonder Forest

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

からから - くるくる - 春 -

【Nコード】

N5273Y

【作者名】

Wonder Forest

【あらすじ】

何時もどおりの日常に、少しスパイスが入ったお話の4部です。

前編

夕暮れの教室に、ピアノの音色が鳴り響く。

その音色は、驚くほど綺麗なのに。

そう、例えるなら、何気ない空を描いた絵なのに。

空だと分かるのに、青が足りないかのように。

朝焼けの眩い赤でも、夕暮れの切なくなる赤でもない。

青が足りないと分かっているのに、青色が完全に抜け落ちていた。

僕は、彼女がこんなに綺麗な音色なのに、なぜ色が足りていないのか不思議で見つめていた。

見つめていた僕に、演奏を終えた彼女は、訊ねる。

「どうだった？私の演奏。」

僕は、素直に答える。

「とても綺麗な音だった。綺麗な白黒の音。」

「白黒なのは、鍵盤の事なの？」

そうじゃない。

「色だよ。色が、ない。」

「音に、色は無いわ。」

「ごもつともです。」

「んー。心？が無い。」

「？ピアノに、心は関係ないわ。」

確かに楽譜上では、関係ないけどね。

「僕は、ピアノは弾けないけど、何かが足りてないのは、分かるんだ。」

「心が、足りていないと言うのなら。」

うん。

「貴方が（僕が）、埋めて（埋めて）ちょうだい（あげる）。」

この世界に、色が付けられる日。

チャイムが鳴り、少女は少年の元に。

「今日も、お弁当作りすぎたから、一緒に食べない？」

そう言つて、僕に毎日お弁当を作ってくれる。

「何時も、ありがとね、ちいちゃん」

「べ、別にわたぬきの為に作ったんじゃないんだからね」

無理矢理ツンデレになってきた。

「無理しないで・・・いいんだよ？」

「・・・」

視線を逸らされた。

まあ、こういう意味の分からない属性付加はよくあることなので気にしないでお弁当を頂く。

「うん、ちいちゃんが作るご飯は何時も美味しいね。」

「毎日・・・お味噌汁作るわ、私」

お嫁さんの座を、狙っているらしい。

「ちょっと、気が早いんじゃないかな」

「貴方の為なら、私、白みそ派から赤みそ派になるわ。」

人の話を聞いてないだど！？話を強引に変えるしか・・・！！

「わあ、このタコさんウィンナー美味しいなあ、この卵焼きも美味しいのかなあ？」

じゃりっ

「!？」

「やだ、私ったらお砂糖の量間違えちゃった」

分量もそうだけど、砂糖だと・・・!？」

「てへっ」

「そんな養殖された天然、僕は認めない!!」

また視線を逸らした。

だから、なんでそうやって属性入れようとするんだろう。

「ちいちゃんは、ちいちゃんのままが一番可愛いよ?」

「・・・貴方のそういうところは本当に、卑怯よ。」

少女は、静かに俯いて、囁いた。

「さあ、帰りましょう」

少女は、当然のように言う。だから僕も、当然のように返す。

「うん、けどなんで自転車無いの？」

少女は言う。

「だって、青春は二人乗りで下校でしょう？」

「だからって学校に自転車置いていくの？」

「朝、貴方に迎えに来てもらえるじゃない。」

生徒指導の先生が黙っていないぜえ。

「さっ、行きましょう。」

少女はもう、後ろに座って待機している。

僕はサドルに跨り、後ろのお姫様に尋ねる。

「どこまで行かれます？お姫様」

「ヴァージンロードまで、ちょっと」

「そんな気軽に行きたくないよ!？」

この世界は進む。ゆっくりと。

前編（後書き）

どうも、いよいよ最後の部となりました、わんだーふおれすです。
まあ、つながりほとんど無いんですけどね（笑
最後までぜひお楽しみ頂ければと、思います。

次予定：11/27

中編

僕は橙色の空の下、自転車を漕ぐ。君を乗せて。

あまりにも夕日が情緒を掻き立てるから。

わざわざ遠回りして、河川敷にまで来てシチュエーションも整えた。

だから、今こそ僕は言おう。

「ねえ。僕が未来から来たって言ったら信じる？」

「ええ。私たちの子どもの名前を覚えてくれるなら。」

「なんだって!？」

聞いてないよ!？未来の自分!？

「私たちの間には何人子どもがいるのかしら、パパ。」

「パパとは呼ばせない!！すいませんでした!！」

彼女は、お腹をさすりながら、言い返す。

「いいのよ別に。慌てずとも未来は、決まっているのだから。」

「あ、その公園に寄っていいこ?。」

僕は、話を強引に逸らす。

「ええ。わたぬきと一緒になら、何処でもいいわ。」

ちよつとした恐怖を感じながら、僕は公園を目指す。

公園で、僕と彼女は歳に似合わず、ブランコに乗り、語る。

今朝の担任の寝癖がどうか。隣の席の女の子がどうか。

周りにくだらないって言われてもおかしくない話。

だけど、二人には大事な時間。楽しい時を刻んで、

やがて、赤く熱い陽は沈み、白く甘い月が二人を照らす。

彼女は、ふっとブランコから降りて一周くると回って言を伝える。

「月が、綺麗ですね。」

月に照らされた少女は、雪を連想させて油断すれば消えてしまいそうで、

だから、僕はただただ肯定しかできなくて、

それを見た彼女はくすりと笑って、

「貴方を愛してるって、言ったのよ。」

僕は、それに何て答えればいいのか分からなくて言葉を探すけれど、見つからない。

思いつくままに僕は答える。

「僕と、結婚したいの？」

彼女は嬉しそうで、少し悲しそうで、

「それはまだ後回し。まずは私と、付き合ってください。」

彼女が悲しそうな顔をするというのに、僕は彼女の側に居てもいいのだろうか。

「僕は、ちいちゃんと一緒に居たい。ちいちゃんの横に居てもいいのかな。」

「貴方さえ、よければ。」

「僕で、よければ、喜んで。」

彼女を悲しませたとしても。僕は、君の隣に居たい。

月に照らされた下、君を抱きしめて、初めて沸いた感情は

僕には醜くも美しいモノに思えたが、これを僕にはまだ言葉に出来ない。

世界が、僕に甘く冷たく祝福をくれる。

中編（後書き）

少し、文学というかポエムっぽいイメージを与えたいのですが、非常に難しいですね・・・。

次予定：11/30

後編

昨夜の一件を経て、僕らはようやく付き合うこととなった。

今までだってずっと一緒だったし、特別、変わったことはない。

・・・ないと、思っていた。

「何がどうしてこうなる!？」

僕はつつこむしか無かった。

「今日はちょっと、作りすぎたから、たくさん食べて」

僕の前には五重の弁当が広げられていた。

「ちょっと、作りすぎたとかそういうレヴェルじゃないよねこれ。」

「だって、ようやく私たち一つになれたんだあって・・・。」

お腹をさすりながら、ちいちゃんは言う。

「!？昨日、僕らそこまで大人になってないよ!？」

思わず呟く僕の悲鳴に、ちいちゃんは悪意のある屈託のない笑顔で答える。

「大丈夫、私への愛があれば食べられるわ。」

愛が、試されている!?

「やってやるああああ!」

「きゃー、わたぬきかつこいいー」

棒読みの台詞を、糧に食べる、食べる…

僕が半分目を覚ますと、病院の匂い（なんとかナトリウムとか科学の先生が言ってたけど、忘れた）がする部屋でベッドに横になっていた。

すぐにお弁当二つ目の途中で食べ過ぎで、保健室に行って寝ていたことを思い出した。

だから、僕は分かっている、眩くしかなかった。

「知らない、天井だ・・・。」

見 知 ら
ぬ、 天井

「遊び過ぎよ。」

「あ、はい。」

隣に、ちいちゃんがいた。

10分ぐらいしか寝てなかったと思うんだけど、ずっと居てくれたのだろうか。

「ごめんね、食べ切れなくて。」

僕らの愛は3分の2ぐらいまでしか、まだ無いのだろうか。

「こういので試される愛を、私は、愛とは呼びたく無いわ」

「うそつきいいいい！！」

1番遊んでるのはちいちゃんじゃないですかああああ

「あれだけ食べてくれて嬉しかったのは、ホント。だけど、それで倒れられたら、意味が無いわ。」

「心配、かけてごめんね。だけど、作り過ぎだよ。」

「ふふ、私もごめんなさいね。」

僕らの間に爽やかな風が吹く。僕も釣られて微笑もうとして、

「帰れ、お前ら。」

保険医が、僕らの時間を呆気なく終わらせた。

僕らが付き合って一月ぐらいが経って、今日もちいちゃんのピアノを聴く。

夕暮れの赤が、切ないほどの赤、オレンジ、少しの赤紫が、教室を照らして、影を浮かす。

影もまた、光を侵食するほど朧げで、毎日のように見ている風景なのにどこか幻想的で、
こういうのが、逢魔が時、とか言うのかなあとか。ちょっと知識人ぶってみたりする。

「今日も、何時も練習してるのを聴かせてくれるの？」

「ええ。ただ、今日は貴方が言う色を付けて見せるわ。」

そう、僕は付き合ってからも聞いているけど、やっぱりどこかモノクロな音にしか聞こえない。

何時もちいちゃんはそれに「ごめんなさいね。」しか言わなくて、僕が何故か申し訳なくて。

ちいちゃんは言う。

「だから、目を閉じて。」

耳に集中して聞いても、きつとこの色は変わらないと思うけれど、僕は言われたとおり目を閉じる。

目を閉じて3秒後、唇に感触。

慌てて、目を開けるとそこには、夕陽を背にしたちいちゃんがいる。

その姿は影でほとんど見えないのに、やはり、光を侵食するかのよう
にそこに居る安心感を、僕に与えてくれて、

だから、僕は思わず言ってしまう。

「今のこの気持ちを愛と呼ばないで、なんと言えいいか分からないよ、ちいちゃん。」

少女はそれに嬉しさを隠し切れずに、

「そう言う時ぐらい名前で呼んでよ、わたぬき。」

「ごめん、好きだよ、千春。だから、何時もの曲を聴かせてくれる？」

「ようやく、私の気持ちが貴方に響いたんだね…。」

青の旋律が流れ出す。

僕は確かに、感じた、僕の心に青が染み込んでくるのを。

彼女が白黒なのではなく、僕に青が足りなかったのか。それは分からない。

だけど、確かに、僕が君の隣で見るこの世界に青が色付いた。

夕暮れの赤が、影に負け、黒に染めていく中、今日の青の旋律は、響く事を中々止めなかった。

後編（後書き）

どうも、わんだーふおれすです。

これにて、4組の恋愛は終わりとなります。

この次は、ファンタジー系の中編小説を予定しています。
ぜひまたお会いしましょう。

次予定：12/3

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5273y/>

からから-くるくる ~春~

2011年11月30日12時49分発行